

ストックホルム・パリ研修に関する報告

学校開発政策コース D2 福嶋 真治

1. Byleskolan 小学校訪問



全体的な感想としては、先生方が強調されていた「マインドセット」のポジティブな効果が上手く引き出されている学校である、ということが挙げられる。真ん中の写真にもあるように、生徒たちに対して「挑戦することによる学び」の意義やその必要性を繰り返し伝えることによって、そうしたメンタリティーを醸成しようと試みていることが理解できる。この姿勢は対生徒だけのものではなく、対教師においても（つまり、学校経営という視点においても）一貫している。「現状を受け止めつつも、それを突破していく挑戦を諦めない」という強い心持ちの教師の姿を見ながら、生徒はそれをロールモデルとして吸収・成長していくというモデルが強く想定されている。そのことが、日本の学校現場ではあまり見られないほどの「教師と生徒の仲の良さ」にも見て取れる。

施設・設備等のリソースに関しても、「自主性の発展を阻害しない」という明確な意図が伝わるものであった。教室内の配置に関しても、場面ごとで柔軟に移動ができるよう、可能な限りスペースを空けており、居心地の良いものとなっていた。リソースの量に関しても、ICTの積極的導入、副教科に必要な機器類の豊富さなど、非常に余裕がある印象であった。

生徒の成長に正の影響を与えやすい、こうした姿勢や施策を、日本でも実現できることが望ましいと考えるが、その実現には少なからずクリアしなければならない課題も多いように感じる。「専門職としての教師」観の確立、潤沢な資源を確保するだけの財政、比較的高い同一性を実現する地域性、など、この学校における成功要因が一定程度普遍性を有するものなのかについての、詳細な検討が必要であると考えます。

2. ストックホルム大での発表

「多様」をテーマとするだけあって、各人のテーマが同じ大会とは思えないほどに分散していたことが最初の驚きであった。とは言え、多様なニーズ・特質を有するアクターたちが同じ空間内でできるだけ摩擦を起こさない形で協働関係を実現していくための条件を探っていく、という点に関しては、どの発表も共通していたように感じる。しかしながら、その

実現手法・案に関しては、本人の思想的背景はもちろんのこと、対象とする国・地域の特殊性に大きく影響されており、国内研究を中心としていた自身にとっては、非常に新鮮で意外性の高いアイデアも多く、大変刺激を受けるものとなった。

自身の発表に対する質問においても、国内では自明視されていた前提そのものが他国の文脈にとっては不思議なものとして映るという場面が多く、その点に関しても新たな知見・閃きを得ることができたと考えている。とは言え、レジリエンスという概念テーマ自体に関しては、やはり国内よりも海外でのほうがその理解が圧倒的に進んでいるおり、海外で研究を進めることの意義を再認識するとともに、あえて日本国内でレジリエンス研究を進め、その独自性を明確にしていくことの必要性も同時に感じる事となり、実りと（良い意味での）悩み多い発表となった。

3. UNESCO 訪問

国際機関、特に国連のような非常に大きく複雑な組織に対して、殆どバイアスに近いような敷居の高さを感じていた自身にとって、今回の訪問はそうした印象を大きく変えるものとなった。まずは、日本の職員の方々から直接その想いやキャリアパスを伺えたことにより、「自分であればどのようなステップが想定できるだろう」と捉えることができたのは大きな収穫であった。また、大きな活動の大綱のようなものは漠然と把握してはいたが、具体的に一人一人の職員の方々ができるような活動に従事されているかという点に関して、具体例を交えて説明がされたことも、その理解をより明確にさせることにつながった。

最後に質問をさせていただいた「他部署・他機関との連携」に関しては、パリという立地が促進要因となってプロジェクト発足につながった例や、共通のテーマ・アジェンダという核があることによる自律的な連携の醸成の例などを詳しく知ることができたのは、「組織のレジリエンス」というテーマで研究している自身にとっても、非常に興味深い学びとなった。

4. OECD 訪問

先の UNESCO 訪問同様、組織に対する漠然とした把握に対して、具体的な実践例や行動目標の説明等によって、明確な理解へと近づいた。ただ、プレゼンを担当された方のキャラクターによるものなのか判らないが、発表内容から伝わるスタンスに少しだけ違いを感じた。どちらが好ましいというような問題ではないが、OECD における発表の方がビジョン中心の比較的大きな枠組みでの話が中心となっていたように感じた。恐らく UNESCO では日本人が担当されたこともあり、より内実に迫るミクロなテーマが中心となったこと、OECD ではその全体像の提供がメインテーマとなっていたことが大きく影響していると思われるが、OECD が価値志向的なスタンスを強く有しているのは驚きでもあった。そうであるが故に、こうした違いを持った機関同士が互いの強みを活かしながら連携していくことの意味は、これまで以上に強調されてもよいように感じ、そうしたダイナミクスに自身・自身の研究はどのように関わることができるのかを考えさせられた訪問となった。